

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

乳幼児期に育みたい資質・能力が育まれている姿を、子どもの小学校就学時の具体的な姿で示したものに「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」があります。これらは、到達目標ではなく、保育者が指導を行う際に、必要な援助や遊びの中での育ちを見るためのものです。

ア 健康な心と体

乳幼児教育施設等の生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に動かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。



イ 自立心

身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。



ウ 協同性

友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。



エ 道徳性・規範意識の芽生え

友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いをつけながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。



オ 社会生活との関わり

家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付く、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、乳幼児教育施設等の内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。



カ 思考力の芽生え

身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。



キ 自然との関わり・生命尊重

自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え方や言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたり、大切にする気持ちをもって関わるようになる。



ク 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

遊びや生活中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。



ケ 言葉による伝え合い

保育者や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。



コ 豊かな感性と表現

心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。



○「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、3つの視点、5つの領域のねらい及び内容に基づいて、乳幼児教育施設等で乳幼児期にふさわしい遊びや生活を積み重ねることにより、乳幼児期の教育・保育において育みたい資質・能力が育まれている子どもの具体的な姿であり、特に小学校就学時に見られるようになる姿です。

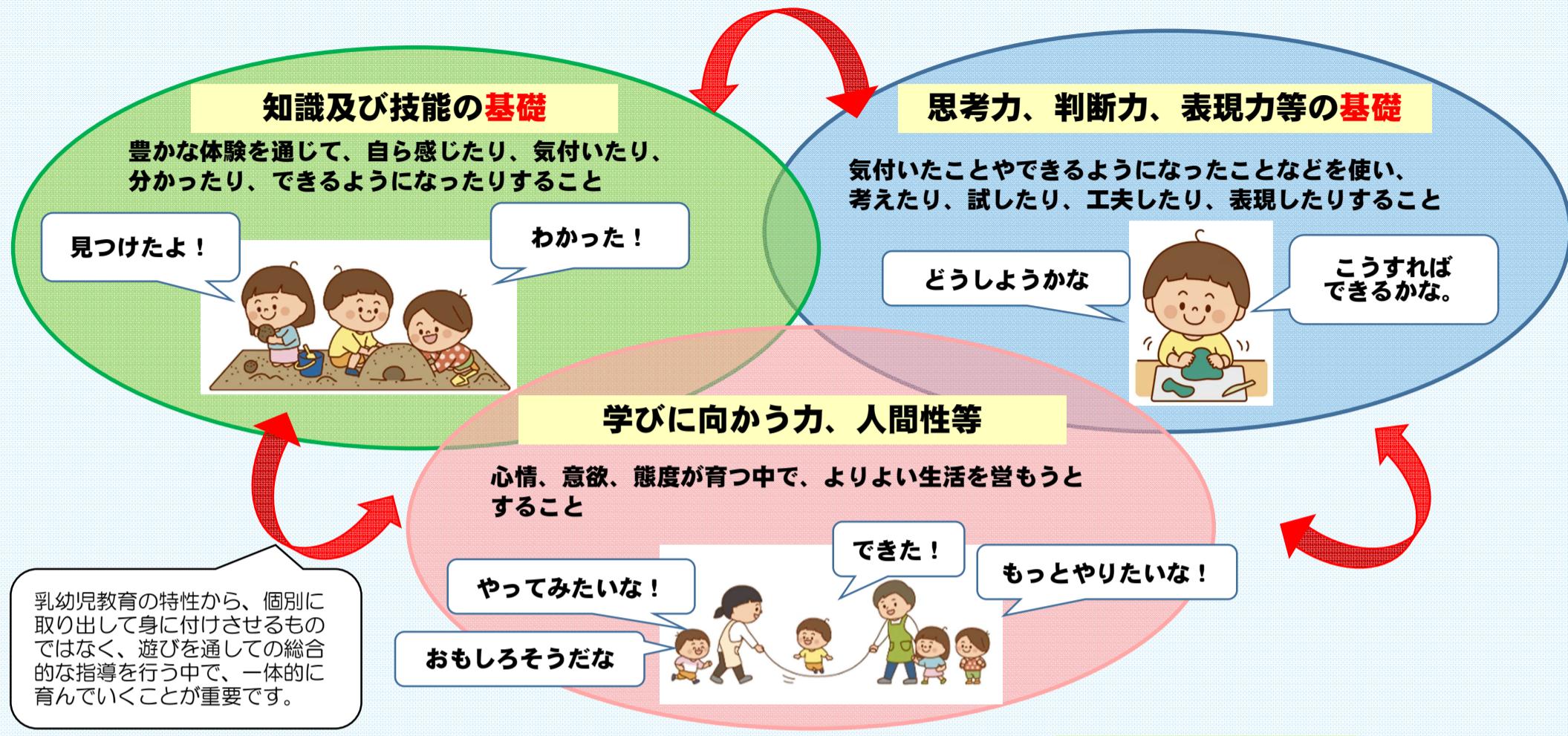
○保育者は、遊びの中で子どもが発達していく姿を、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置いて捉え、一人一人の発達に必要な体験が得られるような状況をつくったり必要な援助を行ったりするなど、指導を行う際に考慮することが求められます。

○「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が到達すべき目標ではないことや、個別に取り出されて指導されるものではないことに十分留意する必要があります。子どもの自発的な活動としての遊びを通して、一人一人の発達の特性に応じて、これらの姿が育っていくものであり、全ての子どもに同じように見られるものではないことに留意する必要があります。

○5歳児に突然見られるようになるものではないため、子どもが発達していく方向を意識して、それぞれの時期にふさわしい指導を積み重ねていくことに留意する必要があります。

育みたい資質・能力

乳幼児期から高校まで、育みたい資質・能力は一貫しています。乳幼児期は遊びを通して、小学校以降は教科等を通して、3つの資質・能力を育んでいきます。



乳幼児期

遊びを通しての学び

乳幼児期は、知識を教えられて身に付けていく時期ではありません。
遊びを中心として、頭も心も体も動かし、様々な体験や経験を通して学んでいきます。

乳幼児期の教育・保育は、内容を乳児期は3つの視点、幼児期は5つの領域で示しています。各領域の内容を総合的に展開し、幼児期にふさわしい経験と学びを生み出していくます。

小学校以降

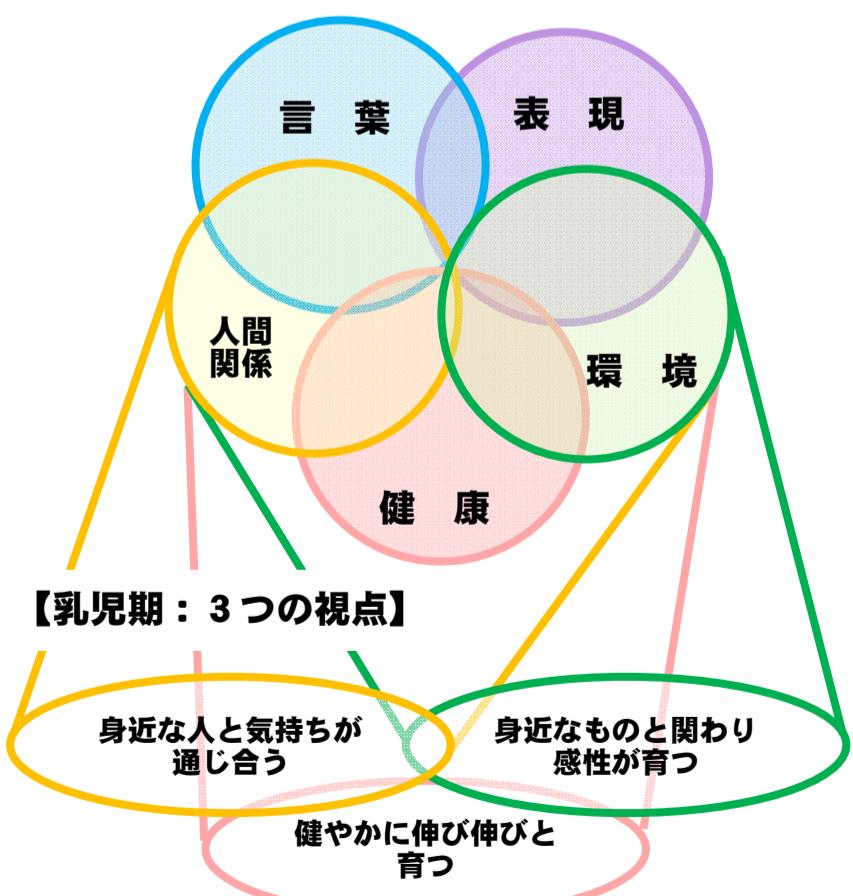
教科等を通しての学び

小学校では、教科等を通して、体系的・系統的な学びが始まります。乳幼児期に遊びを通して育まれた資質・能力を踏まえ、各教科の等の特質に応じた見方・考え方を働かせて育みたい資質・能力を育成していきます。

【小学校以降：教科等】



【幼児期：5つの領域】



架け橋期の指導

乳幼児期の教育・保育と小学校教育との円滑な接続が図られるよう、5歳児～小学校1年生の2年間を「架け橋期」と位置づけています。

特に、小学校入学当初においては、乳幼児期において遊びを通して育まってきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫が図られます。